

# 幕末期における宇和島藩の動向(3)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前稿 (第 11 巻 第 1 号)

1 弘化元年宗城の襲封～嘉永 6 年 6 月ペリー来航

カ) 徳川斉昭と宗城(B)

キ) 高野長英の来藩

ク) 宇和島藩の軍事改革(C)

ケ) 徳川斉昭と宗城(C)

コ) 宇和島藩の軍事改革(D)

本稿

2 嘉永 6 年ペリー来航～万延元年 3 月桜田門外の変

## A) ペリー来航～日米和親条約の締結

### ア) ペリー来航と宇和島藩の対応

第 1 章において、宇和島藩 7 代藩主伊達宗紀から 8 代藩主宗城に継承された軍事改革を、威遠流砲術を中心に、宗城の参勤交代を考慮に入れながら追究した。この軍事改革はとくに徳川斉昭との密接な交流を伴っているため、斉昭と宗紀・宗城の書翰のなかにその思想性、後期水戸学に基づく攘夷論・尊王翼幕論の濃厚な存在をみた。しかし、現実の問題として、幕藩制国家のなかで、外圧に対する統一的な思想や政策を確定することは不可能である。斉昭・宗城ら“有志”は阿部正弘政権に江戸湾防備策をとらせ、全国諸藩に防衛能力の向上を命じさせ、鎖国体制の維持を強調するのが精一杯で、実際には自藩の攘夷態

勢を具体化することも、藩財政上から容易ではなかった。

伊達宗城は、嘉永6年(1853)4月27日、参勤交代のため江戸を発駕し、5月24日に帰国した。その途中、5月10日、伏見で宇和島の菩提寺金剛山大隆寺の前住(隠居)晦巖道郭と会っている<sup>1)</sup>。このことは、宗城が晦巖を通じて京都の情報収集を行っていたことを示す。宗城はすでに米国使節来日の報には接していたであろうが、帰国に際してとくに対策を命じた記事はない。

6月6日、江戸藩邸では大目付廻達により浦賀に異国船来航が知らされた<sup>2)</sup>。麻布龍土の上屋敷は海辺ではないが、家中一同へ武器の準備等の警備強化が命ぜられた。8日の大目付廻状では、非常の場合、火消役同様の相図で登城または持場警備が命ぜられた。藩邸では、大頭心得・頭取に松浦権左衛門を命じ、威遠流3貫目大筒掛戦士兼堀江南平・入江左吉・中井族之助、野戦銃掛戦士兼松末奎兵衛ら4人、別に3貫目大筒掛豊田丈左衛門、戦士虎之間7人、3貫目大筒掛戦士兼信崎隼人ら中心の防備体制が整えられた<sup>3)</sup>。広尾下屋敷居住の宗紀の身辺警固も指示された。異国船は12日に退去した。

宗城の許に、ペリー来航の報が届いた日時は不詳だが、6月19日に吉田藩に届いている。同日、宗城は幕府に対し、「建白愚意大要」を書き、薩摩・肥前・越前・津等の諸侯にもその草案を送付している<sup>4)</sup>。

#### 建白愚意大要

一、此度墨奴軍艦渡来スル処、堂々大都会之海上ニ候得共、如入無人境、凌圧驕恣難尽于筆端、皇国千古無比之御大耻ト可申、廟堂ヨモヤ慨然発憤、被雪御耻辱候御籌策可有之トハ存上候得共、若苟安姑息、依然タル時ハ乍憚 御国家御維持之程無覚束、各愚意管見ナリトテ、沈黙罷在候時トハ不存候故、先便薩肥福井津杯親交之諸君ニ相談申遣置候故、此後之御手当可有之儀ハ、愚意可及密奏ト存候、尤一両輩之建白ニテハ、御啓達モ難期、有志之同席ハ一般申合候上ニ存候、連名ト各封之处ハ返簡不参内ハ難決候

一、活眼ヨリ見候時ハ、諸藩ハ手足指ニテ、江都ハ首領、咽喉之要地也、

守禦之御備不堅固ニテ、夷虜進攻侵掠ニ至、御守禦不相叶形勢ニ至、通和御免カ、大城御立除杯ト相成候而者、如何様諸藩丈夫ニ致守備居候トテ、国躰不立ハ申迄モ無之、左スレハ各封内予備之傾力、彼地堅固ニ相成様、同席申合、以衆力砲台軍艦迄製造成上相備置、異日有事時ハ、其場所々々へ出張、面々報国之振義勇、致対戦候ハ、可然ト存候  
神祖ヨリ二百余年、浴恩波候而々、且此国家之大耻ハ天下之公憤ニ候得ハ、諸家異論モ有之間敷、此儀不急之急策ト存候

但在府召連候人数備立ハ第二之考ニテ可然、可忽事ニハ無之候得共、前述之建白不出来候而ハ、幾千万之人数アリ而モ、犬死ヨリ外ハ有之間敷候半、外藩タル同席ニ而、右躰成上候ハ、幕ニ而モ御傍觀モ難被成、御譜代大小名モ願立可申ト存候

この建白は、従来の宗城の思想を要約しているが、その末尾を見ると、薩・肥・津、さらに土佐等、外様雄藩大名を糾合し、さらに幕府・譜代大名を奪起させようとしていることが分かる。

同月2日、中井九郎左衛門(筑後、番頭・持筒頭、若年寄)、須藤段右衛門(但馬、目付本役軍使兼帯、小姓頭・持筒頭・若年寄)に異国船情報収集のため、立帰り出府が命ぜられた(中井は途中から帰藩)<sup>5)</sup>。宗城の側近の家老桑折左衛門・穴戸弥左衛門・松根内蔵(図書)・須藤らは宗城の股肱の臣として多忙であった。とくに須藤は、7月21日に松平春嶽宛宗城書翰を持参する密命を帯びていた。6月23日付宗城書翰では<sup>6)</sup>ペリー来航事件の顛末の情報入手、徳川斉昭の攘夷策の幕府不採用を歎息し、須藤を「当節都下之光景為見分、僕カ臥内之臣須藤段右衛門目付役軍使兼帯出府」を命じたとして、宗城同様に情報提供を求めている。ペリー来航の目的と幕閣の対応に関する情報の入手を求めたのであろう。

7月に入り、ペリー来航に関する情報は宇和島にもたらされはじめた。また、宗城は重臣にも諮問した<sup>7)</sup>。7月10日、宗城は細川侯ら七大名に内港沿岸守衛が命ぜられたこと、ペリーの再来航を確実とし、対戦を予測して、江戸が戦火に

見舞われるとして、江戸表と領内海岸防備についての建白を求めた。家老桑折左衛門は、水間所左衛門(目付役軍使兼帯)・船山武左衛門(目付本役軍使兼帯)も同意見として建白しているが、その内容は伝えられていない。宗城は「覚」15条をもって意見を総括している。第一に幕府への建白密奏と薩肥両侯への協議に触れ、その返答を待つとする。第二に「是ハ秘中之秘密ニ候得共」として、この密奏が幕府に聴許されず、「却而蒙嫌忌計ト見切候ハ、相捨(○下略)」、島津斉彬から近衛殿(忠熈、右大臣)に事情の詳細を歎訴し、さらに忠熈から天朝(孝明天皇)に上申し、天皇から幕府に下命させるという策略を、同年春帰国前に斉彬と密談していたと告げている。この策略は、のちの一橋派の工作手法と同じ構想である。また、宗城は帰国途中に寄京して忠熈に工作していたという。しかし、成功しなかった場合は「御互ニ沈黙可致ト申遣候」と述べている。

第三に江戸湾防衛のため、砲台築造・軍艦建造が許可された場合、献上の歎願書を提出するという。軍艦は擬洋装軍艦を構想している。第四に大広間詰の「同席判談之上」、江戸防衛か領海防衛かを幕府に問い方策を決定する。宗城の思考の根底には、幕府の天保の薪水給与令に伴う警備体制があった。第五に参勤の省略化の命もあったが、江戸出陣については、幕府が石高相応の兵員を決定する。第六に警備の場所が決定すれば、大銃5門を備砲台に乗せて防禦する。第七に宇和島藩兵の動員数は奥表平士50人、中之門15、6人、徒士30人程度とし、さらに加勢も考慮する。第八に定府足輕は出入が多く、譜代以外は小銃を持たせても無用に等しく、その対策を考慮せよという。第九に武器は「江戸在合之人数」に応じて用意する。第十に穀類貯蔵の吟味。第十一に麻木灰等、江戸で調達できぬ品は国許から送る。第十二に大銃の砲手は「貫目以上大銃ニ而、海上之船打候事ハ、胆勇之者以熟練発放肝要」のため士分が担当する。野戦銃は大銃組足輕から吟味して扱わせる。これは江戸・国許とも同様である。第十三に、この非常動員数・武器の経費を計算して軍費に充当するが、「実ニ内外憂悶心痛之時ニ候、奮励弥此時也」という。第十四に諸流砲術について、「此

度大銃打前、一統威遠流修業申付候趣可及沙汰事」と、現在を威遠流への統一の好機と認識する。第十五に百人組の鉄砲射撃希望者はこれを認める。以上がペリー再来航についての当面の対策であった。

7月13日、「江戸表非常御備向取調頭取」に桑折左衛門が任命され、若年寄松根内蔵・目付三輪清助・元締馬島六右衛門・宇都宮九太夫も専属となった<sup>8)</sup>。

7月16日、宗城は在府中の松平慶永に返書を呈した<sup>9)</sup>。宗紀・宗城と慶永の間でも、ペリー来航の対応をめぐる交流があった。それは第一に慶永から「以御庇先 廟堂機密モ相伺、奉多謝候」と、將軍家慶の病気と死没、家定の將軍就任という事態に至るなかでの幕閣の対策であった。宗城は「明公」慶永の良策立案を期待し、自分も「尤砲台ハ成上可申、軍艦モ同様、僕杯茂十八門備フリツキ位ハ造製可及カト奉存候」と胸を張る。そして、「廟堂之御模様、墨奴呈翰之御返答振並ニ呈文和解モ御手ニ候ハ、極々密拝見奉希度候」と希望する。二伸では、徳川斉昭の攘夷策を幕閣が諮問するかどうか聞いている。

7月23日、宗城は重ねて慶永に書翰を送った<sup>10)</sup>。宗紀を通じて慶永から「墨舶入港書余程精細ニ認候もの」の恩借を謝し、家慶の逝去を「天下之不幸此事ニ極申候」と述べ、攘夷策の充実をもって補翼・追孝の義とする。しかし、幕閣の実態を「一寸先ハ暗夜之秋と痛歎」し、斉昭・慶永が老中阿部正弘を教戒し、「御新政御補翼被成上候義」を渴望する。帰国中の宗城は悲憤慷慨するばかりである。越前藩では、ゲペール銃100挺、大砲10門を鑄造し、さらにヤアーケール1挺、カラヒーン1挺を製作すると聞き、当時の同藩の所有はホーウィッスル・4半斤カノン・1半度天砲1、総計16門であるのに対し、宇和島藩は24封度長ホーウィッスル・32封度同砲1、半斤野砲カノン1を装備しているという。これに加え、18封度カノン・24封度長ホーウィッスル・30封度カルロン等を鑄造中という。装薬は年内に2,000貫目を製造させるという。

7月26日、江戸から御徒早便大久保七太夫が宇和島に着いた<sup>11)</sup>。7月1日阿部正弘から仙台侯に伝達された米国大統領の国書ならびに和解が回達され、諸大名に意見を求めていた。「合衆国書翰和解」(2冊)は漢文と和文の両様であっ

た。この長文の国書の内容については省略する。宗城は27日早朝これを読み、老中・若年寄等に意見の提出を命じ、とくに松根内蔵と密談している。米国の国力と蒸気軍艦・大砲の威力は宗城の想像以上であった。

同日付の尾張藩主徳川慶勝宛書翰では<sup>12)</sup>宗城はペリー再来航までには、「迎モ巨艦并御台場等モ急卒ニハ出来申間敷」とし、「先々穩便ニ過候而柔弱至極カニ候得共、願之通一時之奇計ニ而、五年七年モ御試ミ、願意之品々石炭以交易崎陽ニ而被 仰付」、その間に江戸湾・近海の防禦を強化し、国内では由井正雪・大塩平八郎のような「暴逆之徒」の蜂起を警戒している。斉昭の考えとまったく共通しているといえよう。

8月2日、目付三輪清助は、損亡の大時に際し、軍備専一のため儉約令を発した<sup>13)</sup>同月2日、家老桑折左衛門より米艦来朝に関する「公辺ヨリ御尋心付書上草稿」が宗城に提出された<sup>14)</sup>米国の本意は自国の強大化のために、貿易を開始して日本の財貨を取得し、「終ニ本邦ヲ摩下之如ク取扱」という植民地化の危機をまず指摘する。しかし、日本は「武備充実、士氣勇剛、渠ヲ取挫可申<sup>(カレ)</sup>」実力はないため、開戦の危機は回避したい。あとは宗城と同意見で、米国漂流民の取り扱い、食料・薪水・石炭の供給等を長崎で行う。これを3年程試行して、その間に近隣諸国、貿易等について考え、「本邦之御武備充実、防禦之術ヲ御大丈夫ニ成据ラレ、渠ヲ御打挫可出来御見留出来候上者、如何様共今度之御屈辱ヲ被相雪候御処置可有御座」と、究極的には軍備の充実を重視し、つぎの9つの具体策を提案している。

第一に「幕府御親戚之内」、つまり御三家・御三卿・御家門らの親藩中の英明の人物を將軍の名代總督に任命し、軍事の指揮権を掌握させる。第二に諸大名の財政難の救助のため、「御手伝御上納金諸御献上物等」を全廃し、軍備を充実させる。第三に江戸近辺の海岸に堅固な砲台・塹壘を構築する。第四に軍艦の建造。第五に沿海の諸藩は膝元の防備を嚴重にする。第六に江戸近海防禦のための軍費に、幕府の軍用貯蓄金を放出する。第七に浦賀の防衛は房総の広域ではなく、「内港防禦」に凝縮する。第八に米国は軍艦・大砲の実戦に長じており、

陸上戦闘でも多くの大砲・玉薬・砲手を用意するよう、幕府が諸藩に命ずる。第九に蝦夷地の防衛の重視。他の重臣たちの建白もほぼ同様であったと考えられる。

8月3日、在府中の前藩主伊達宗紀が幕府に「奉謹呈愚意」という建白書を提出した<sup>15)</sup>。まず「元来音信不通之国」の米国が厳禁の浦賀で国書を提出したことを不当とする。しかし、浦賀の防備は弱体で、国書の受け取りは止むを得ないを考える。宗紀も交易年限を設けて、国内の必需品を除外して交易を行うことを提案する。「アメリカ人ニモ御内談ニ被及」、「蘭人カヒタン被招呼、篤ト其義御尋モ有之」、オランダ・ロシア・イギリス等も交易を希望するであろうから、先方の要求前に貿易の方策を考慮しておく。宗紀は実利主義に立って諸外国と年限付きの貿易を開始し、その間に洋式の軍備・大砲・軍艦製造まで伝習して日本の軍備を充実し、「御一国御独立」を期待する。宗紀の考えも軍備の充実に主眼が置かれているが、貿易について宗城との間に温度差が認められる。勝利のない戦争は回避し、「万事万端御旧格御改正有之度事」と幕政改革も求める。

8月8日には、7月18日にロシア使節極東艦隊司令長官プチャーチンの艦隊4隻が長崎に来航したという情報が、八幡浜庄屋浅井萬兵衛から伝えられた<sup>16)</sup>。

8月10日、宗城は非常事態に備えて3カ年の儉約令を発し<sup>17)</sup>、13日に「公辺江御直書ヲ以被仰上」建白書を提出した<sup>18)</sup>。まず「前書」で、ペリー提出の国書に対する返翰は国威を失うことになる。「呈文之条々、悉ク乱措禍殆ニ而、嚴ニ御禁断有御座度儀者勿論ニ候得共(○下略)」と、米国の要望を全面的に否定する。しかし、開戦して必勝の成算はなく、かりに江戸湾で勝利を取っても、伊豆七島・その他の諸島は占拠され、海運も制圧され、江戸は必然的に生活必需品も欠乏する。そこで、「内嚴防備期必戦、外示威信、仮甘言之意ヲ以御処置被為在候而如何哉」と、1、2年の間要求の一部を認め、その上攘夷の挙国体制を確立するとして、返書の案文まで示す。ロシア・イギリス・フランス3国も視野に収められている。浦賀での国書受領は「全ク一時之御権道」であり、明年のペリー再来航時には長崎で応対せよといい、これまたペリーへの伝達の案文を

示している。

つぎに「密奏」において、将軍家慶の死去後の処置は旧格にとらわれず、経費を節減して軍費に充当するのが追孝になるという。代替わりの儀式も同様である。第三に「愚意建白条件」では6カ条の対策を述べる。①伊豆・安房・上総3国を江戸城の「咽喉地」であるから、10万石以上の大名領地として重鎮を建てる。②伊豆大島は「洋海之一巨島」、外国に占拠されないため「予屯兵」を置き、軍艦を繫泊させる。③伊豆七島その他の島嶼も同様に占拠の患憂がある。蝦夷地はロシアと境を接し、一海水を隔てるのみである。米国船航海の順路でもある。もし蝦夷地が侵攻され、松前に迫れば防禦できず、内地の奥羽に被害が及ぶであろう。松前藩を大藩と振り替え、嚴重な設備をする必要がある。④軍艦建造の急務を説き、迅速にオランダ商人に命じて艦工を来日させ建造すること。領海を有する諸大名にも建艦を許可し、商民の製造や外洋航海は禁止する。蘭工の招致は明春には間に合わぬから、早急に浦賀内外に4、5隻の軍艦を繫泊させる。⑤実用便利の大銃を製造し、玉薬等も十分に貯蔵し、砲手の養成のため、下曾根金三郎を重用して旗本たちの師範とする。幕府は無益の失費が莫大であり、賄賂は嚴禁する。⑥幕府・諸藩の政治改革として儉約・経費節減を実行し、軍備を充実する。1、2年後には必戦の覚悟を固める。このため手伝い・献金の免除、諸藩藩邸の人員削減、大名家族の帰国という政策を求める。さいごに「嘆願」として、浦賀等防備のため、「先年ヨリ之御法ニ而武器類一切江戸表江相廻儀、海陸共御停止故」、外国は数千里の波濤を凌ぐ軍艦、攻城・野戦の武器、豊富な実戦の経験があるが、日本は二百年來の泰平のため、「守衛防禦モ席上之論而已ニ而、武器類トテモ代々持伝之品多ク」、非実用的である。このため、諸藩に藩兵・武器の江戸回送、軍艦建造を許し、計画的に防衛計画を進める。「御処置之趣ニ寄、大平之安危、人心之向背ニ懸リ候義、何分難相黙、可然御差図被成下候」と急速な実行を要求している。

8月11日、幕府大目付順達廻状が到着した<sup>19)</sup> そのなかで、江戸藩邸での軍事教練、四季を通じての空砲射撃、江戸への鉄砲等の輸送を認めた。



8月26日、長崎旅勤中の大野昌三郎が、8月朔日付の山本物次郎の「魯西亜船渡来一件」という報告書をもたらした<sup>20)</sup>。7月18日、プチャーチンの艦隊4隻の長崎来航である。この報告は詳細を極めているが、来航の状況およびその目的、交渉の経過をよくまとめている。ロシアは「今世界第壹之大国ニ而、属国モ数多有之儀ニ御座候処、米穀乏敷、場所ニ寄子供養育難相成所モ有之由ニ付」、日本と信義を結び、米穀の供給を主眼とし、交易を要求するわけではない。また、ロシア人は温順で、長崎市中の混乱もなかった。4隻のうち2隻は26日に退船した。プチャーチンの乗艦フレガット型の乗員は426人で、要望に応じ魚・野菜が供給された。

8月29日、藩庁は郡奉行・町奉行に文言同断の通達をした<sup>21)</sup>。米国軍艦の浦賀渡来およびロシア軍艦の長崎渡来について、武備充実を第一とし、「御国中総躰致和合、銘々其業ヲ励、一国之力ヲ合セ候事ニ無之而者、御防禦向茂不行届訳ニ付」という挙藩の臨戦体制をつくり、百姓・町人はその職業に出精するとともに、金融・商品の流通を安定させ、正路の生業に従事するよう諭示された。

9月7日、須藤段右衛門が帰藩し、宗紀の伝言と書翰、慶永と戸田伊豆守等の返書をもたらした<sup>22)</sup>。

9月22日、八幡浜庄屋浅井万兵衛が、肥後藩領佐賀関庄屋上野理平太より得た情報を書状にして提出した<sup>23)</sup>。長崎のロシア艦隊は2隻が残り、長期に滞在して要求を出すようである。浦賀来船の米国軍艦のうち1艘が琉球に碇泊している。薩摩藩では琉球通いの商船のうち、桜島で8,000石積の船を完成した。浦賀来航の米艦の図、浦賀から江戸品川までの諸大名布陣の図は入手しているか。以上は長崎で得た情報であるが、同時に同浦辰三郎が長崎から帰って以上の情報が確認され、プチャーチンの船の絵図を提出している。

10月2日、宗城はかねて熟慮して執筆していた「培勇録」「管見誌」を旗本組一統に閲読させるため、家老桑折左衛門・桜田佐渡へ渡した<sup>24)</sup>。4日には組々侍中以下まで、直書を以って下命した。「培勇録」は外国船来航のなかで、「諸国一般に伝聞、巷説紛紜、人心危ふみ駭き候様子」だが、「我藩中は追々申出候主

意、与篤領掌し、一統憤振の様子」と家臣団の認識の統一を評価し、かつ外国事情に関する宗城の見解を述べて士気の高揚をはかろうとした論文である。米国軍艦の浦賀来航、国書の受領とペリーの再渡来に加え、長崎へロシア軍艦が来航してまた書翰を受領し、かつ滞留し続けている。これを「日本武力の不振に帰し可申、開闢以来無比の一大患、困難之時」と把握し、幕府の対策は明確ではないとする。「皇国之御為、社稷之為、粉骨焦慮し而、夷狄を攘ふの手当、無二念必戦之覚悟、今日に可相整ハ勿論にして」と攘夷を調強し、「日本精神」の培勇を求める。彼我の戦力の隔差は軍艦と大銃の不完全にある。藩は幕府の許可次第軍艦建造の含みあり、大銃は鑄造を増加させている。玉薬の製造は拳藩体制で進行し、砲手の養成、長槍・剣技の練熟、士気の高揚が調強される。

「蛮舶を海外に電掃せば、我等 天朝公辺への忠勤、御代々尊霊、大屋形様(○宗紀=春山) 江の孝道不過之、臣たるもの、此微意を領得し、本に報するの道を重んじ、努力せよ、努力せよ、意長紙短、不尽言」と結語している。

「管見誌」は宗城の世界認識を表現している。西洋諸国について、「彼蕃夷トモ君相亦徳ヲ協セ、力ヲ戮セ、勉励研窮シテ、内修政教、外拓風化、賢能ヲ任使シ、窮理・開物・文武・学校アツテ、百藝ミナ局ヲ置キ習練ス、是以、星曆・歩算・輿地・測量ヨリ史学・兵法、食ヲ足、財ヲ理ムルニ至マデ、其人ニ乏シカラズ、其酋長ハ遠略トテ遠方ノ他国ヲ吞併スル事ヲ務メ、事好トテ事企ヲ起シテ功業ヲ立、好ム者送ニ出ス、故ニ上無聖主、下無賢弼、文教明ナラズ、武備整ハザレハ、外患ノ侵侮免カレ難ク、岌々乎危カナ、可警、可懼、可励ナリ」と、西洋諸国の中央集権的官制の整備、諸科学の発達、植民地主義について述べている。彼我の相異は「皇国ハ万古独立、神聖ノ皇統、彼ハ道モナキ狐朋狗党」という“国体”と道德の違いにある。しかし、現実には外患に際して海岸での防禦、内戦での対応も不可能であり、外圧が「不測ノ内乱」を惹起することもありうるとする。つぎに欧米諸国について概略する。地球はアジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカに四分され、アメリカを南北に分けて五大州とする。大平海(大平洋)諸島を合わせて「鳥々斯答刺利」(オーストラリア)とい

う。ヨーロッパ人種とアジア人種の特徴を捉え、そのヨーロッパ人が五大州を併呑した。中国でも周辺の遊牧民族が侵入して建国した歴史はあるが、「海外ノ諸蛮」が首府まで擾乱することはなかった。ヨーロッパ諸国は古代から壮麗な都城を建設し、航海術に長し、貿易・戦争を続けてきた。崇神天皇の頃、「馬則多泥亜」(マケドニア)の「歴山」(アレキサンダー大王)が諸国を攻略し、ヨーロッパ・アジア・アフリカの三大州の内を兼併した。さらに「略亜」(ローマか)の「伯多禄」<sup>(○ボナパルト)</sup>、フランスの「那波列翁」(ナポレオン)が数十国を併有した。「何レノ国モ広ク、万邦エ互市ヲナシ、富国強兵是務トシ、世界一統ノ功ヲ期セサルハナシ」、このような強大化は「人心固結」によって可能となる。これに対し、「皇国ハ富饒無比ノ国ナレトモ、大洋中ニ独立スレハ」、外国の接近は少なかった。戦国期のポルトガル人の来航と貿易、鉄砲・大砲・キリスト教の伝と禁教、南蛮諸国の来航と朱印船貿易、寛永の鎖国体制の確立について略述する。その後来航したロシア・イギリス・「共和政治国」(アメリカ)の貿易要求について各論を述べている。

「魯西亜ハ世界中第一ノ鉅邦ナリ」、白多録(ピーター大帝)は「才武英傑、潜テ其国都ヲ離レ、英仏其他ノ国ニユキ、船廠・火薬局ニ遊ヒ、国ニ帰テ伝授シ、其造ル所、艦礮等、西洋ノ則トナル」と評価する。ある意味で、大帝は宗城の理想像ともなりうる専制君主である。元禄元年(1688)英国艦隊を破り(翌年即位)、文化5年(1808)仏軍60万余を撃攘して、大西洋・ヨーロッパ・アジアに進出し、加摸沙都(カムチャッカ)に到達し、わが蝦夷の諸島に接近した。ロシアは「其為ル処、頗ル仁義ニ以テ、絶国ヲツキ廃国ヲ興シ、国政風俗ノ美、軍隊兵刃ノ備具スル事、西洋諸蕃ノ比類スヘキニ非ス」という。必戦必勝を心懸け、遠略を専らとし、日本との互市の許されないのを万国に対して恥とし、その志を達成しようとしている。「諸愚利亜は(○中略)五大州中ニ属国ノアラサルハナシ、人心モ尤権智多ク、風俗姦黠残忍ナリ、航海戦闘ノ術ニ熟シ、専ラ諸国ヲ兼併スルヲ努メ、阿蘭陀 皇国ニ互市ヲナシ、大利益アルヲ羨ミ、流涎スル事既ニ貳百年」と評価し、その植民地主義と日本との貿易要求の

強さを指摘する。「共和国(○米国)ハ式百年前荒漠ノ地ナリシニ、和蘭・英吉・仏郎ヨリ民ヲ移シ土地ヲ闢キ、英吉利多ク兼併シ、過半同国ノ所領トナリシニ、政事過刻<sup>(ママ)</sup>ニテ土着ノ者堪カネ、終ニ七八十年ハカリ前、ワシントン(人名)ト云英雄起テ英吉ト絶シ、七ケ年ノ間及戦争、得全勝、後ニ英吉ト和シ、ワシントンヲ盟主ト仰ギ、三十余州之合同独立国トナレリ」と、移民・開拓、独立戦争・合衆国の成立を捉えている。「別ニ君長ナク賢材ヲ推テ官長トシ、百官ヲ設ケ政事ヲナス」というように、大統領制・三権分立の政体に関する認識もある。産物は多くて自給されているが、さらに強大化をめざして万国併呑の意志があり、日本を狙っている。戦鬪に長じ大軍艦幾百艘、艦毎に大砲四五十門を備え、進退左右自在、万里を航海する。「故ニ今ニシテ彼ト戦ント欲ル、我ヲ算計セバ勝算難シ」と結論する。

日本と西洋の一国を比較すると、「十ノ一ナル不能、強弱ヲ以計レハ、彼ハ千里ノ遠境モ咫尺ノ如ク」、大艦・大銃を有して「防ニ術ナク」、多年実戦の経験を積むが、「吾ハ古武国ト雖モ、今ヤ談兵坐上ノ論」に過ぎない。宗城は朱子学的尊王攘夷思想に基づいて、日本を世界の中心とし、「万邦ヲ君臨スルユエンハ」、「教ハ聖教五常ノ道ヲ守リ、義ニ因テ私ヲ専ラトセサル美風ナリ」と、儒学思想の優越性を主張する。この国の防衛には軍艦と3貫目以上の大砲が必要である。アヘン戦争の具体例を挙げ、植民地化の回避のためには、元寇における勝利の実例を挙げ、「吾ニ予備アレバ何ゾ彼ヲ恐レンヤ」という。

「培勇録」「管見誌」と同時に、江戸定府の藩士に対しては「定志編」という論文を發した<sup>25)</sup>これは定府の藩士中に、宗城の持論に反対する見解があったためである。「定志編」の特徴は、宗城がこれまで江戸湾・江戸城・松前口・琉球等の防衛に重点を置いた鎖国体制の維持を強調していたのに対し、自国(宇和島)の防衛に主眼を置いていることである。江戸湾等の防備強化も重要であるが、「外様の家にて、命もまたず自国の守衛は打捨、大城の防禦に力を傾けんとて、万一自国の變あらば何を以て応ぜん、若一寸彼に奪なば、如何にして申訳あるべきや」との観点に立脚する。「幕府より自国守衛專要との命下らば、命に

従ふ可也、何ぞ敢て、大城守衛を願んや」という。これが幕府に対し「大平の澤に浴する武門の任を、寸志万分の一を報じ奉る処なり、天朝への忠勤、父祖への孝道、藩鎮の職業ならずや」と、藩祖秀宗が十万石拝領の恩顧から説き起こし、「治乱興亡、本に報すべき基本ならずや、日夜困苦して失はんを恐る、深く此意を領すべし、不可忘、研究せよ、々々」と結論する。在府の藩士が江戸防衛に主体を置いているのに対し、宗城はそれに自国防衛を付加している。この考えは、やがて宗城の一藩割拠論に展開するものとして注目しておきたい。また、これら三編の宗城の著作によって、藩内の意志統一、宗城の主導権の確立もなされたといえよう。

10月23日、宗城は阿部正弘宛に軍艦建造の願書を提出した。<sup>26)</sup>「日本船ト違候堅固之軍艦并三本柱其外便利之船、総而異国風之製造ニ仕候而モ不苦儀御座候哉」と擬洋風船として、蒸気機関の点については触れられていない。27日、藩士梁川義雄（6代藩主伊達村寿3女雍と伊達右近光和の子）が、薩摩藩の造船業視察のため巡遣の内意を受けている。<sup>27)</sup>11月5日、船奉行に命じ、渡辺作之進・辻源七郎、船大工・船頭らを同行させることになった。島津斉彬はすでに嘉永4年から洋式帆船（18反帆・3本マスト）の洋式帆船の建造を始め（安政元年3月完成、伊呂波丸）、翌5年12月には3本マストの琉球大砲船建造の許可を得、同6年5月からは洋式軍艦（安政元年12月完成、昇平丸。長さ15間、大砲10門・臼砲2門、小口径自在砲4門）の建造を始めていた。<sup>28)</sup>宗城は斉彬から強い影響を受け、自力建艦の構想を持った。梁川等は鹿児島からの帰途、佐賀藩および長崎来航の異国船の見学も考慮していた。

11月6日、阿部正弘は宗城所蔵の「千八百二十二年 ハンドレジンク トットデケンニスファンデン シケープス ポウテンジインスト デル ヨンゲラフシーレンエレ アーデルボルステン ファンデコーニンケレーキ 子ーデルランドセマリ子トールイセレエキ 但船製作之書」の提出を求めている。<sup>29)</sup>翌7日には、大目付順達状によって、西洋法船法の用語となっている外国語をすべて和訳して使用することを命じている。<sup>30)</sup>8日には、松根内蔵・須藤段右衛門・

宇都宮九太夫も鹿児島に巡遣されることになった。<sup>31)</sup> 12月2日、内蔵は来早春九州への巡遣について、長崎の通詞出入りの西吉兵衛・森山栄之助・名村貞五郎、用達土築禎之助に出入り用達等を命じ、各年1両宛を与えることを宗城から命ぜられた。<sup>32)</sup> 同日、宗城は阿部正弘に軍艦建造について、「堅固之軍艦壹艘用意仕度奉存候処、領内ニ異様之製作仕候職手之者無御座候ニ付、長崎奉行へ御頼、阿蘭陀人江製造注文仕度奉存候」という伺書を提出した。<sup>33)</sup> 以上によると、宗城は鹿児島の洋風船建造の視察と同時に、長崎通詞等を通じての情報収集とオランダへの軍艦発注を構想していたことが分かる。

12月8日、宗城は松平慶永に書翰を認めた。<sup>34)</sup> 慶永からはすでに11日朔日・8日付の2回の書翰によって、「魯呈翰和解」1冊、「別新聞書」1冊が宗城に届けられていた。宗城は両冊を読み、「呈翰文意ハ僕臆量と大相違無御座候、此度如何御処置可相成哉」と、プチャーチンの意図を了解し、幕府の対策を案じている。武備不充実の時、ロシアの要求却下は不可とし、「信義之二字」で対するという。慶永同様軍備の充実を至上とするが、「無総督、戦具不整義、勇不振今日にして決戦御座候よりハ丸く彼か注文通り御免の方がまし位の儀にて」と、敗北後の開国受諾には反対する。徳川斉昭の策論を幕府の政策の基盤としたいと考えている。幕府は軍艦は建造せず、バッテリー雛形を製作するというので、宗城所蔵の「リーニー船造蘭書」を提出したと知らせている。12月16日、富沢大珉弟子が長崎から帰り、10月23日にロシア軍艦出帆との情報がもたらされた。<sup>35)</sup>

12月25日、幕府大目付より洋式砲術が諸藩で発達していることをうけて、外国語を国訳して統一使用することが達せられた。<sup>36)</sup> 12月27日、家老より言路洞開に関する直書が出され、政治に対する意見開陳の道が開かれた。<sup>37)</sup>

12月28日、八幡浜庄屋浅井万兵衛より長崎に関する情報がもたらされた。<sup>38)</sup> プチャーチンのロシア艦隊の退去、また12月に4隻入港したが、要求は不明であるが、交易と考えられる。アメリカ船はロシアに加勢するという評判である。熊本藩も今度浦賀の備場を命ぜられ、明11日から15日までに計7,500人余が

派遣され、その外に7月以後派遣されている人員も多く、その惣帥は細川一門の長岡監物である。「諸国大造之御物入之御手当、此末如何成行可申哉、(○中略)御国家安全を只々奉祈候、神風ニ而皆殺しになれかしと而已祈申候、宇佐八幡宮江も奉幣(○下略)」と、浅井に情報を提供した佐賀関庄屋上野理平太は述べている。薩摩の手船も佐賀関へ来航、その大筒は周囲4尺5寸、玉の直径1尺の大きさだと記している。宇和島藩の九州全域における情報収集ルートの形成、それに基く対策の立案も理解できよう。

12月20日付で、長崎の山本物次郎からロシア船再渡来について報告があった。<sup>39)</sup>10月23日、ロシア船退去までの状況は宇都宮・松田両氏に話していた。12月5日再渡来以来以後の模様を詳報し、幕府、肥前・筑前両藩の動向を伝えている。幕府応接掛の大目付格筒井政憲・海防掛川路聖謨は、16日にロシア船に乗船し、饗応を受け、大砲打方や調練を見学した。18日、プチャーチンは返翰受領のため上陸し、交渉が継続した。国境・通商について協議されたが、事態は解決されなかった。

安政元年(1854)正月3日、松根内蔵・須藤段右衛門が薩摩・肥前へ出発した。<sup>40)</sup>5日、宗城は松平慶永宛書翰で、<sup>41)</sup>嘉永7年となって「約束之時期不遠、追々墨奴再渡来可致」と述べ、ペリーは8月に無人島(小笠原諸島)へ行き、正月に琉球に来て、2月末から3月初旬に再渡来するであろうとの薩摩藩からの情報を伝えている。熊本藩の長岡監物の浦賀出張の非常事態を告げ、萩藩も同様とし、自らの出府の時期を報じている。だが、ペリー船隊は正月14日に浦賀に再渡来との情報が2月朔日に宇和島に届いた。<sup>42)</sup>宗城は松平慶永に対し、前年のペリー来航時と同様の防備体制では、「中々対戦とハ参り兼候半、決而城下之誓ニ可相成哉と切齒憤痛、此時ニ存候」と伝え、藩兵の着具練兵の検閲を強化すると述べている。<sup>43)</sup>高知藩からもペリーの動きに関する情報がもたらされた。4日、宗城はこの件を藩士に伝達した。

3月3日、長崎の有田彦助を用達に、西吉兵衛・本木昌造に出入りを命じた。<sup>44)</sup>これによって、宇和島藩の長崎における出先機関が確立されたといえる。同日、

薩摩藩から譲渡されたバッチェラが到着し、真風<sup>マカゼ</sup>と命名して領内を運航させることとした<sup>45)</sup>

3月3日、宗城は参勤交代のため宇和島を出発し、11日に大坂へ着き、家老桑折左衛門に書翰を送った<sup>46)</sup>。ペリー再来航をめぐって幕閣の意見が対立している実情を、「乍然和親すべき閣中ハ左なく、不可為和親、夷奴ハ不備よりしてゆるし、内外処置顛倒可憂悶至也、阿閣之握全権候義を、他閣妬忌する事と被察候」と指摘する。老中首座阿部正弘と松平乗全らの見解の相異を、幕閣が一致して対処すべきペリーの要求に対処する姿勢ではないとする。攘夷論に立つ宗城は、「水公ハ通商ゆるさぬ、阿閣始ハゆるすと相分候処」と斉昭と正弘の見解の相異も指摘し、「阿壱人にて己<sup>(ママ)</sup>が効にせんと、水公へ謁しとき候由主張して、不快に存候様子、それより両途に分候趣」と理解している。幕閣の見解が二分すれば吏僚も当然に分裂し、その動向を心配している。なお、藩領沿岸の「八幡浜見分も相済候半、住吉山砲台とも追々凶にして可被差越候」と、八幡浜および住吉山（樺崎）砲台の築造案がすでに成案となっていたことを示し、領内の石炭採掘を進め、福岡から巧者一人を招いていく方針を示している。石炭は「異奴へ通商御免ニ相成候ハ、第一番之交易品と相成申候」とあり、それは肥前藩からの連絡の上でとられた措置である。17日には四日市から左衛門に書翰を送っている<sup>47)</sup>。宗城は3月3日、日米和親条約が締結された情報を入手している。「関東花旗一条ハ見聞書にて可相分、親交書通にも申来候処、つまり於下田港以代料石炭可相渡処可相成候故、十日頃にハ帰帆云々申来候」とあり、ペリーの要求に幕府が応じたことを、「古今無比之大耻辱、併呑楷梯と可相成、遺憾尽申述候」と植民地化の端緒と認識し、続いて英仏魯も同様の条約締結を求め、許可しない訳にはゆかなくなるとする。また、ペリー艦隊から石炭の見本を入手、熊本・萩両藩には軍艦建造の件を知らせ、薩摩藩と合議の上、図面を幕府に提出するという。大坂では諸藩の軍艦建造が巷説になっていると、藩士田手次郎太夫が報告していた。

3月26日、宗城は左衛門に返書を送った<sup>48)</sup>。(1)真風の図を拙画とし、徳久忠介



に訂正させよ。村田蔵六は蘭伝で軍艦建造を申し出ており、この件は承知した。蘭よりはアメリカ製の方が「亜西亜海（○太平洋西域）にハ便利とし、薩摩（斉彬）と協議の上、アメリカの輕舸の図を回送する。宗城はアメリカ軍艦の外輪船を知り、オランダ船より優位とするのである。(2)須藤但馬・三輪清助・都築織衛（燧洋，朱子学者，藩学明倫館教授）の密奏が衆議の上その要点が届いた。これらは「都先ハ黄喨之忠論也」と一蹴されている。(3)「当今炮術盛に相成，及戦争候而も往古と違，専大小銃を以決勝負様可相成ニ付，当時出精，廿歳以上位にて往々可致長」と強調し，「実ハ廢弓換銃度存候」と，軍事改革について強い姿勢を示している。(4)八幡浜口砲台場は雨井（川之石浦）辻堂付近がよい。宇都宮・松田に巡見させ，築造は急がないとする。(5)「小銃ヒストン直候儀，（○中略）千発以上ためし候而も，発機具丈夫にさへ候得ハ，先づ安心と存候」と，慎重に電管・火薬の製造を指示する。(6)船用大銃の件は承知した。(7)「当今軍備專要之時節，此先両三年ハ失費も夥数事ニ候処」，野村・山奥組は貧窮し，不作のため疲弊している。幕府献上物の免除を希望する。以上である。

3月27日，宗城は江戸に着いた。

### イ) 雄藩大名と宗城の交流

ペリー来航，日米和親条約締結の前後，伊達宗城は徳川斉昭を盟主とし，松平慶永らの親藩大名および島津斉彬らの大広間詰外様大名の攘夷派の結集をはかりつ，宇和島藩の軍事改革の路線を追求した。その真意は攘夷にあるが，現実には条約の締結を黙視せざるを得ず，しかも，軍事費の捻出は殖産興業，石炭等の輸出による利益の追求を考慮しなければならず，その攘夷論は破綻する要素をのぞかせていた。本節では斉昭・慶永らとの書翰による交流のなかで，その真意と現実を考えたい。宗城の参勤帰国の時期から上府の時期にかけて考察したい。

#### 徳川斉昭

嘉永6年12月25日付宗城書翰では<sup>49)</sup>ペリー再渡来の時期の切迫を憂い，幕府は11月1日に海防強化を発令しながら，「未タ著

眼一定も難仕、当惑之極奉存居候」と、斉昭らの攘夷論の影響拡大を期待している。その別紙で、「福井（○慶永）・僕杯奉渴望候ハ、今日 閣下御総督且御輔翼万機細大事御裁断被為在度奉至願」と述べ、斉昭の力量、慶永の辰閣（播磨竜野藩主・京都所司代協坂安宅）への工作にもかかわらず、「畢<sup>(ママ)</sup>境ハ御偉謀御忠策御貫達不相成、思召通不参故と奉遥察」と洞察する。プチャーチンの来航について、露使応接掛の筒井政憲（西丸留守居）・川路聖謨（勘定奉行）らの応待のなかで明らかとなったロシアの要求、日露国境画定の問題については「猖獗絶言語候、（○中略）万事 明公へ御委任可有之筈ニ奉存候」という。幕府の大船建造の解禁を受けて、その建造を「当今一大急務」とする。水戸藩からの大砲74門の幕府への献上に感激している。

安政元年4月9日付宗城書翰では、<sup>50)</sup>「扱当春以来、花旗奴（○米国）御処置之趣、追々伝承仕、尚又過日松越前守・薩摩守へも寛々出会之末、万縷密話も仕候処（○下略）」と、日米和親条約の締結以後、宗城は慶永・斉彬とその後の情況について綿密な討議をし、斉昭の策論を幕府が採用せず、「万古無比之御恥辱被為受候事ニ相至」と憤激している。斉昭は、条約調印後、海防参与の辞任を申し出、慶永・斉彬も絶対的な攘夷論の実行は不可能と感じ始めるが、宗城は斉昭になお「廟議参謀可相成候ハ、御為可相成と奉存候故」と、攘夷論の振興を期待する。幕閣内部の対策に不一致があつては、「艦礮何百万出来候而も、御基本不相立故、（○中略）片時も早く、廟堂之御一洗奉渴望外無他事御坐候」と述べている。別紙では、米国軍艦の備砲ボンベカノン（鉄砲）の「縮形写真」を借用を求め、銃と台は自藩で鑄造したいという。家僕米艦に乗り込ませたというのは、吉見長左衛門のことで、ペリー再渡来の時である。

翌4月10日、斉昭の宗城宛書翰では、自らを「所謂敗軍之将、果して分寸之御裨益無之」と、その苦しい立場を陳述している。<sup>51)</sup> 同日さらに斉昭は返書し、<sup>52)</sup> 米艦の備砲雛形写図の貸用を認め、慶永・斉彬にも呈覧するとし、詳細は水戸藩神発流砲御家荻信之介に尋ねるよう指示している。

4月15日付宗城書翰では、<sup>53)</sup> 退任後の斉昭について、「閣下之御仕落に無御坐

段ハ、晴天白日之如く奉存候」と、和親条約締結の責任は斉昭にはないと考え、「御参謀者名計故、不被遊御安心段も、甚敬服仕申候」と同情し、今後も慶永・斉彬ら有志と密議を継続すると伝えている。

日米和親条約の調印によって、斉昭らの攘夷論は新しい現実と直面し、宗城も有志の解体を慨嘆せざるを得なかった。<sup>54)</sup> 事態は安政5年の日米修好通商条約の勅許問題、井伊直弼の大老就任、将軍家定後の継嗣問題をめぐる一橋派と南紀派の抗争、安政大獄という幕末の国家的非常事態へと動いていく。

和親条約は、安政元年3月3日の日米、8月23日の日英、12月21日の日露と、三国対象にそれぞれ締結されていくが、宗城は斉昭の攘夷論に立って激しく幕府を批判し、断固たる外交姿勢を求めている。

5月12日付宗城書翰の別紙(1)では、<sup>55)</sup>「尾公（○名古屋藩主徳川慶恕）御誠意雍塞仕候而ハ、以の外之儀、通徹氷解ニ相成度奉渴望候」と、斉昭に協力して幕政回復に努めるよう勧めていたことを明らかにした。これは慶永・斉彬との密話のなかから進行したもので、有志の連帯を強めようとしている。外様大名の宗城には、「閣老不平計ニ無御座、御内輪ニ而、種々御意外之事被為在候、（○中略）全体之蘊奥評悉不仕候ニ付」というように、閣内の情報は親藩有力大名に依存しなければならなかった。別紙(2)では、同年4月のペリー艦隊の箱館視察問題に触れ、その対応が「都下又浦賀・下田杯より手柄宜敷」と、最初は平穏であったが、「近日中松前より飛檄参候、其因ハ段々墨奴及乱妨候由」と、松前藩が態度を強化させていることを伝えている。

5月28日付宗城書翰では、<sup>56)</sup> 5月17日、斉昭が登営し、将軍に会い、阿部正弘に神奈川条約の改訂を要求した件に触れ、「御庭拝見」の名目で小石川邸に斉昭を訪問したいと希望している。宗城は慶永・斉彬の訪問も叶えば、有志団結の強化が可能と考えている。しかし、この日以降、斉昭が登営することはなかった。宗城は6月4日、16年ぶりに斉昭に対面している。

9月1日付宗城書翰では、<sup>57)</sup>「英奴近海へ渡来可仕風評伝聞仕候所、頗猖獗之夷候ハ、一層御案思申上候」と、同年閏7月15日のイギリス東印度艦隊司令長官

スターリングの長崎来航に触れ、「墨より二段御扱宜敷不相成様」と、日英和親条約の締結について、幕閣の姿勢を牽制している。

10月7日付宗城書翰では、<sup>58)</sup>「其内近日浪華へ魯舶渡来候処、乍憚御予備も無御座、且輕蔑自儘之所業、絶言語候次第、殊帝都隣近之場所候得共、天機之程如何可被入と（○下略）」と、9月18日にプチャーチンが大坂湾に入り、天保山沖に出現したことを、京都への接近の問題と認識し、「閣老始ハ泰然たる様子」で、目付大久保忠寛（一翁）に上京を命じたが、それもプチャーチンの退去で中止となった。「追々伝承仕候而ハ、京摂之騒動、実以難尽筆端」と事態を重視する。プチャーチンは10月3日和歌山付近の加太浦を経て、10月15日には下田に来航、江戸湾をめざし、幕府は筒井政憲・川路聖謨らを下田に派遣し、11月4日、東海道大地震の津浪で乗艦ディアナ号は座礁大破するに至る。しかし、その苦境のなかでプチャーチンは、日露和親条約を締結させるのである。一方、クリミア戦争中で、英・仏はトルコを援助してロシアと交戦中であり、「英奴」（英使節スターリング）は閏7月15日に長崎に来航した。宗城は「英奴、墨奴共申立候趣にてハ、トルコ云々ニ付而ハ、皇国近海をも環航仕、見懸次第魯奴追撃可由」としながら、「英・魯、互ニ通謀」する可能性を案じている。宗城は日米和親条約同様、幕府の専断による調印を黙止しがたいという。

12月14日付宗城書翰では、<sup>59)</sup>齊昭に「海上砲術全書」（ゼアール之訳書、Zee-Artillerie）、「遠西火攻撰要」（エルンスト之訳書、Ernst-Vuurwerken）の二書（嘉永3年に一応筆済）を校合のため借用を願っている。

宗城は、安政2年2月5日江戸を出発、3月3日宇和島に帰国し、同3年（1856）3月11日宇和島発、4月9日着府するという参勤交代をしている。安政2年の両者の往復書翰は伝存しない。<sup>60)</sup>齊昭の攘夷論は、現実には実行不可能の方向に動いていくが、宗城はなお齊昭擁護の立場をとる。その両者をめぐって慶永・斉彬・豊信との関係がある。幕府は安政2年6月9日、オランダ国王から蒸気船スピン号（観光丸）を贈られて、翌7月29日には長崎海軍伝習所を設置するが、宇和島藩は1人の藩士も派遣していない。宗城の攘夷論の延長

から生じたことであろう。8月14日、斉昭は再度政務参与を命ぜられ、10月9日には佐倉藩主堀田正睦が老中首座に就任している。この年、薩摩藩は外輪蒸気船雲行丸の建造に成功していた。宇和島藩は藩士水野深右衛門・高間権八を水戸へ派遣し、荻信之助らの神発流砲術を学ばせている。一方、嘉永6年7月22日には、慶永と斉彬が営中で、新將軍家定の後嗣として一橋慶喜の周旋を約したというのが<sup>61)</sup>それが顕然化した運動となるのは、安政4年10月のことである。宇和島藩では斉昭・慶喜を支持する宗城に対し、義父宗紀は積極的に井伊直弼に接近していく。これらの問題は後述するとして、宗城と慶永の交流を次に考えてみたい。

#### 松平慶永

宗城の慶永宛書翰は、天保14年5月17日以降多数伝存するが<sup>62)</sup>

斉昭宛書翰の趣旨と重複するものも多く、ペリー来航以後の書翰について考察したい。

嘉永6年9月21日付宗城書翰では<sup>63)</sup>「大礮運轉全書、今般五冊図一軸差出申候」と軍事書の提供に触れ、「清英盟会之図」(アロー号事件か)を閲覧して、「既ニ浦港墨夷書翰受取之図も出来候半」との慶永の憤慨に賛同し、慶永から洲崎・品川に砲台11カ所が完成した図を提供されている。ペリー来航に伴う江戸市中の「世評紛紜」の状況も知らせている。筒井政憲・鍋島斉正が建議して、西国には大量の石炭が産出することを幕府に知らせている。慶永と老中阿部正弘・牧野備前守忠雅との間では、情報交換がなされている。幕閣の「廟議ハ頻々可被為在候得共、世上へ御発令無之」という状勢にあって、慶永は国許から有志の面々を江戸に呼び、米国への処置を「篤ト被及御評議」という案を宗城は支持している。宗城は慶永の攘夷論に同意し、「被期必戦度トハ、僕愚論も御同意、大同小異計」とするが、実際には「和親論多々ト奉遥察仕候」という。幕閣内で斉昭の建白も難しく、慶永に「只々賢兄奉頼候外無御座候」と依存する。攘夷派の有志は「天下之知己屈指五六輩トモ参兼可申」というのが実情であり、「仍呉々モ水府君御補翼、表裡名実一貫ニ而、諸閣老一和二而、短才ハ短ナリ、竭誠忠挽回攘狄之御処置」がなくては、「徳川之御代万世無彊」の維持は不可能

とする。そして、結論は、「尤今日直ニ戦闘ニ及候ハ、必敗ハ顯然、内実スルマデノ御謀略ニテ夷ヲ御扱被置、永クモ三四年ニハ上下戦争之覚悟粗整」とする。幕府のオランダへの軍艦発注の情報も入手していて、オランダが拒絶すれば、ロシアに発注してもよいと述べている。

同年11月6日付宗城書翰では、<sup>64)</sup> 斉昭の連日の登営、奮闘にも拘らず、幕閣の新政策は発令されず、不満を持っている。品川・洲崎の砲台で防禦するのではなく、軍艦で撃攘するのがよいという。砲台築造は江川英龍の発想であるが、その砲台築造の経費で軍艦・蒸気船を建造するという案を提示している。斉昭には海防評議の辞任ではなく、軍事総督の委任を望んでいる。前年6月、オランダ商館長クルチウスが幕府に東インド総督の書翰を渡し、ペリー来航を予告した情報も入手し、「実ハ墨即蘭人、蘭又墨人と奉存候」と、オランダ・アメリカ両国には日本開国のための意志疎通があると、宗城は考えている。藩内では威遠流砲術の訓練を強化し、「過る三日には廿四ポンド長忽鑕ニ而手続打候処、廿放にて三間的にて九丁之距離にて四発命中、余四方三四間へ散落仕候、(○中略) 明春ハ大鑕陣列連放操練可仕と存居候、砲台も又此頃存立居申候」と伝えている。江戸湾防備のためには、下曾根金三郎・佐久間象山の外に、「世上草莽之有志」も集める意見を持っている。宗城は御家門の慶永の力量によって、「明公始有志忠勇卓偉之論」を高めようとする。

同月24日宗城書翰では、<sup>65)</sup> 慶永の阿部正弘への建白を「今ニ不始御忠誠至当之御確信」とし、筒井政憲らの長崎におけるロシア使節応待は止むを得ず、浦賀へ回航する可能性もあると推察する。ペリー再渡来については、江戸の義父宗紀から情報が達せられていて、幕閣の処置では「泣血城下之誓と相成」と断定する。「若水公(○斉昭) 御存念之通候ハ、国法之趣有之、和親交易共不相成義理ヲ以申聞候事ニ候ハ、則理在於我、非在於彼の訳故、将士義勇振憤振も可致、穩当之御取扱にて士氣憤興、献死力候事ハ千々万々無心元奉存候」とする。慶永・宗城とも開国和親を国辱と考え、明公斉昭に挽回の策を期待する。

12月25日付宗城の慶永・斉昭宛書翰では、<sup>66)</sup> 黒田長溥がロシア艦隊の浦賀回

航の可能性のあることが阿部正弘に密翰を呈した。ロシア使節の国書の翻訳も極秘に慶永から宗城に知らされている。宗城はまず日露の境界決定の問題を重視する。「唐太島」・シコタン島への砲台築造は、幕府は度外視し、「遠避地ハ心にもかけぬ（○下略）」とする。和親交易を許可しなければ、「不測之大患目前に発」するとし、清国との交易を停止しても隣国のロシアには免許せよと主張する。浦賀防衛は洋式砲を有する長州藩、熊本藩に命じ、慶永は「大城御謀主」になれという。斉昭が幕府に大砲数十門を献上したことを賛えている。

安政元年2月21日付宗城書翰では、<sup>67)</sup>ペリー再渡来に関する詳細な情報が慶永から送られ、「知ハ知る程憤痛難堪」、「泣血之外乍残念無御座候」という。江川英龍を始め交易論が幕府内にあるが、これは「時宜之権道」で、「我身在勤中を無難に仕舞、患難を嫁後人より発候説」ときめつけ、斉昭・慶永の胸裡を察するとする。幕府が軍艦建造を水戸藩に依頼したが実現せず、鹿児島藩の蒸気船建造も未着手と知らせている。相変わらず軍事書の交換研究もなされている。

安政元年3月7日、参勤途上の宗城は播州室津から慶永に答書を送った。<sup>68)</sup>日米和親条約調印の詳細が慶永から知らされていた。『昨夢記事』によると、慶永はペリー再渡来時の幕閣の見解を、「何分応接方ニ而ハ、矢張兵端ヲ相開候か、又は江戸海へ乗込候勢にも有之故、通信交易ニケ条御許諾之様に申唱候由、神奈川探索より申越候」と把握し、幕府を批判している。慶永は謀臣中根雪江とともに、阿部正弘・熊本藩家老長岡監物・水戸藩士藤田誠之進（東湖）、名古屋藩主徳川慶勝らに強力に働きかけ、大広間詰の大名の同意も拡大しようと努力していた。その過程で幕府と米国使節との交渉のなかで、幕閣の意見は正弘の忍屈辱論、堀田正睦の開戦反対論、筒井政憲（大目付格西丸留主居）・川路聖謨（目付、応接掛兼海防掛）の長崎開港などの分裂を知った。アメリカは琉球・松前・浦賀・下田のうちからの開港を求め、下田・松前開港に踏みきり、戦争回避のため石炭・薪水・食料の供給にも応ずることになる。2月晦日、慶永は建白の草稿のなかで、幕議の変更を「皇国今茲嘉永七年甲寅の春に当って、初而夷狄之屈辱を被為受候義、乍恐征夷大將軍の御重任は御名而已にて、上ハ天

朝御代々神祖御始御歴世様方へ被対、下は諸大名万民迄へも御信義払地、御申訳ハ被為在間敷義と奉存候」と、宗城に共通する事態の認識を示す。「大將軍の御武威も無之、此節当路参謀之諸御役人は挙而万一売国之賊臣杯と青史に書残し、万古に汚名を伝へ候様にてハ、誠以残念至極」と述べるのは、外様大名宗城では放言できぬところであろう。「右様に治世之粉飾ニ預り候冗贅の勤務一切御放下被成、継夜之御至念を以義勇発達、富国強兵を御勧誘御座候ハ、公辺之御勢にてハ悠然御成就可有之奉存候、左様無之候半而ハ迎も御国威挽回之道は有之間敷と奉存候」と、攘夷体制の確立のための富国強兵策と、斉昭を総督として登用することを提案している。

さて、3月7日の宗城書翰に帰ろう。「藍山公記」も『昨夢紀事』に記するペリー再渡来と慶永の動向の史料を引用しているが、そのなかでも上記の慶永の思想は明確に捉えられている。さらに慶永の宗城宛書翰には「米船渡来見聞書」が付されている。<sup>69)</sup> 米艦船の動向および防備体制、幕府全権林大学頭（<sup>あきら</sup>緯）らの応接状況が詳細を極めて記され、米兵の軍装図・携帯物・国旗、上陸用バイティラ（カッター）図、米軍艦に乗って観察した艦内の構造、3本マストの操作、大砲80ポンド砲の図面と寸法、ドントロ（電管）使用の大砲数、船室の模様など、火薬庫以外は無防備同然に観察されている。

安政元年3月27日、宗城は府中から慶永に答書を送った。<sup>70)</sup> そのなかで「ソルダート（○兵士）之内壱人病死、彼より被任強願、横浜某地へ埋候由、誠以如尊命汚 神土此上あるまじく、扱々苦々敷事」と、死者を水葬せず墓地に埋葬したことを、やがて「為追善邪教之一字取建（○下略）」というキリスト教の黙認に至ると批判する。ペリーの退去も伝えられ、旅船中で再読した『通鑑要覧』明代巻14巻に見える事態と現在を比較して、「こと国の舶思ひつゝゆく旅ハ日をふるさとの夢もむすはず」と詠んでいる。斉昭の条約調印後の動向、徳島藩主峰須賀斉裕・鳥取藩主池田慶徳（斉昭5男）と慶永の密議、慶永の正弘への陳述、名古屋藩主徳川慶勝・熊本藩主細川<sup>よしくに</sup>韶邦・柳川藩主立花<sup>あきひろ</sup>鑑寛らとの間の緊密な交流も知らされている。宗城は慶永の活動を「千万苦戦鑒奴人舶より



も御忠効幾多か倍候半」と評価する。幕閣内における斉昭・正弘排除の動きを警戒し、義父宗紀からの情報に基づいて、慶永と斉彬との連絡強化を切望している。慶永が参勤交代で福井に帰国すれば、宗城・斉彬では老中松平乗全らに制されて幕閣内の情報入手は杜絶すると心配する。

慶永は、6月1日参勤のため江戸を出発する。その時点以後は別項で考察したい。

#### 島津斉彬

嘉永3年8月27日付宗城宛書翰では、<sup>71)</sup> 宗紀と斉彬との間にも往復書翰の存在したことが分かる。龍野藩主協坂安宅（辰閣，京都所司代，安政4年8月老中），阿波藩・土佐藩・南部藩の情報が交換されている。同9月19日付宗城宛書翰では、<sup>72)</sup> 異国船の琉球渡来に触れ、英国船が米国船として来航し、船の修覆と称して薪水等を要求、滞留者もいたという。

同5年9月26日付斉彬書翰では、<sup>73)</sup> 軍事書の翻訳に触れ、「防海試説」を訳出中、「カハールレリー又者海防要用之書物」も所持していると述べている。鹿児島藩はこの時点では琉球問題で手を焼き、帰国中は宗城の周旋と情報収集に依存しているかに見える。

安政元年9月20日付斉彬書翰でも、<sup>74)</sup> 琉球問題であるが、宗城のような激烈な攘夷論は見られず、9月22日付書翰では、<sup>75)</sup> ペリーの琉球来航を報ずるが、極めて短文であり、慶永・宗城との思想の相異性が感じられる。

#### 注

- 1) 「稿本藍山公記」巻44 39丁
- 2) 同 巻45 8丁
- 3) 同 巻45 16丁
- 4) 同 巻45 37丁～
- 5) 同 巻45 42丁
- 6) 同 巻45 56丁
- 7) 同 巻46 12丁～
- 8) 同 巻46 21丁
- 9) 同 巻46 24丁～

- 10) 同 巻46 38丁
- 11) 同 巻46 51丁～
- 12) 同 巻46 80丁～
- 13) 同 巻47 8丁
- 14) 同 巻47 9丁～
- 15) 同 巻47 15丁～
- 16) 同 巻47 29丁
- 17) 同 巻47 33丁～
- 18) 同 巻47 35丁～
- 19) 同 巻47 46丁
- 20) 同 巻47 72丁～艦名等も詳記。
- 21) 同 巻47 88丁
- 22) 同 巻48 15丁
- 23) 同 巻48 60丁
- 24) 同 巻49 2丁～
- 25) 同 巻49 23丁～
- 26) 同 巻49 83丁～
- 27) 同 以下「公記」 巻49 88丁～
- 28) 芳即正『島津斉彬』 120 ページ
- 29) 「公記」 巻50 37丁
- 30) 同 巻50 40丁
- 31) 同 巻50 41丁
- 32) 同 巻51 3丁
- 33) 同 巻51 8丁
- 34) 同 巻51 22丁～魯西亞書翰和解・漢文とも記載する。
- 35) 同 巻51 58丁
- 36) 同 巻52 33丁
- 37) 同 巻52 49丁
- 38) 同 巻52 72丁
- 39) 同 巻52 94丁～
- 40) 同 巻53 4丁
- 41) 同 巻53 4丁
- 42) 同 巻53 24丁
- 43) 同 巻53 28丁
- 44) 同 巻54 5丁

- 45) 同 卷54 7丁
- 46) 同 卷54 29丁
- 47) 同 卷54 31丁
- 48) 同 卷54 45丁
- 49) 河内八郎『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』288 ページ
- 50) 同書 294 ページ
- 51) 同書 297 ページ
- 52) 同書 298 ページ
- 53) 同書 299 ページ
- 54) 同書 301 ページ
- 55) 同書 303 ページ
- 56) 同書 307 ページ
- 57) 同書 313 ページ
- 58) 同書 315 ページ
- 59) 同書 323 ページ
- 60) 同書
- 61) 松浦玲『徳川慶喜』35 ページ 中公新書
- 62) 「宗城公発翰書類」1～7 伊達家文書，福井松平家編纂物の写本
- 63) 「公記」卷48 50丁 嘉永6年以後は『昨夢紀事』参照のこと。
- 64) 同 卷50 25丁
- 65) 同 卷50 83丁
- 66) 同 卷52 21丁
- 67) 同 卷53 47丁
- 68) 同 卷54 8丁
- 69) 同 卷54 14丁～
- 70) 同 卷54 38丁～
- 71) 「御書翰類」第1巻 24丁
- 72) 同 同 25丁
- 73) 同 同 26丁
- 74) 同 同 29丁
- 75) 同 同 30丁